



# ブツダの研究



なんでん屋



ブツダの研究



生まれは、4月8日。

小さいころから、はなまつりを意識して育ってきた。

誕生日は、いつも始業式の日。

考古学が好きで、仏像とエジプトの歴史に興味があった。

それは、お釈迦様を幼少期から知っていたからだと思う。

ブツダについて、価値観を語ろうと思う。

目次

ブッダ (Buddha)

真理のことば　ブッダより

生きることは苦である

大乘仏教と小乗仏教

仏教は「心の病院」

智慧という武器で悪魔と戦え

恨みから離れる

煩惱

憂いと快樂

ブッダを目指す者（番外編）

因縁

悟りは、サイエンスとしても普遍の真理

執着を捨てる

執着

## ブッダ (buddha)

ブッダとは、「目覚めた人」「真理を悟った人」。

釈迦族の王子として生まれたコータマ・シツタルダは、生まれたとき足の裏に車輪があったといわれる。

世界の王か、宗教界の祖が運命づけられていた。

また、母マーマヤが解任したとき、白い像が体内に入る夢を見たそうだが、イエス・キリストの母マリアと同じ状況である。

シツタルダが生まれたのは、西暦2500年前。

イエスが生まれたのは、西暦2000年前。

ムハンマド（マホメット）が生まれたのは、西暦1500年前。

孔子が生まれたのは、西暦2500年前。

なぜか、ブツダ（目覚めた人）は、2500年前からこの世に出てきている。

仏陀と呼ばれる人は、最初存在しなかった。

シッタルダが悟りを得た後、ブツダと自分を認識したのだろう。

自分だけで真理を悟ることは、不可能。

何者か、例えばブラフマンにその都度教えてもらわなければ、悟ることは出来ない。

悟ること自体は、自分の経験の中でしか、真実は見いだせない。

瞑想だけでは、経験が埋まらない。

経験を積んだ中での瞑想なら、真理を見つけることが出来よう。

これは、現代にも通用する。

確かに、私も経験した。

この瞑想が、祈りという形であれば、キリスト教にも通用するし、イスラム教も同じだ。

イエス・キリストとムハンマドもブツダと呼んでいいのだろう。

ブツダは真理を悟った人であるが、イエスは神の子として、ムハンマドは指導者として歩んだ。

どちらも指導者から始まったといえよう。

## 真理のことば　ブツダ

「真理のことば　ブツダ」　著者　佐々木閑　Nエス出版より



最近は、ブツダのことばなる本が出版されているので、これに沿って語る。

生きることは苦である

## 大乘仏教と小乗仏教

ブツダの教えは小乗仏教と呼ばれているとのこと。

その経典は様々に書き換えられ、ブツダの教えに一番近いとされる「ダンマパダ」が、真理のことばといえるだろう。

宗教というものは、後の人たちが自分たちに都合のよいように変遷されている。変遷といえば聞こえはよいが、後の時代の指導者によって、時代に沿った考え方やよかれと思いき書き換えてきた。

仏教も小乗仏教と大乘仏教に分かれた。

キリスト教も様々な分派がある。

時代が変われば、法律も変わるし、生き方も変わる。

20世紀では、法律はどんどん細かくなり、生活は便利になったが、生き方は変わっていない。

ものは豊かになったが、精神面は2500年前と同じ。

なのに、思想家はどんどん内容を変えてくる。

思想家を名乗らなくても、書籍で、テレビで、ラジオで生き方を変えてみてはどうかと推奨してくる。

果たして、生き方を変えられるだろうか。

目の前の便利さだけを取り、生き方を全く振り返らない。

人間の道徳も守らない社会のルールだけが先行してくる。

事件が起き、破綻すれば、ルールを作った組織を責める。

まったく、生き方を考えず法律の遵守に命をかけているみたいだ。

これが、産業先進国の運命。

破綻すれば、必ずや道德と宗教の時代が来る。

小乗仏教は、自分の力でなんとかする考え。

大乘仏教は、他力本願の考え。

今の時代は、他力本願の時代であるといえよう。

ブツダのことばは、2500年前と変わらない。

今の時代もそのまま、教えとして生きている。

先の時代も変わらないだろう。

新たな真理が出てくるだろうが、付け足しの改良。

そして、また本質を変えてくる。

破綻すると、またブツダのことばが見直される。

永遠に輪廻転生、バラモン教の教えのようだ。

ブツダは、心のあり方を変えれば、苦しみを克服できると説いた。心のあり方、ものの見方を変えることで、苦悩から解き放たれる。これは、ウソではない。

あなたの常識を変えること、真実を自分で発見すること。それが、真理を悟るということ。

真理を悟った瞬間、あなたには未来がある。

未来永劫に渡って、苦はなくなる。

ただ、一時的な苦悩はある・・・

老い、病い、死、これは必ずやってくる苦悩と書いてある。

最近の科学では、これを少しでも和らげる解決させる技術を発展させている。

しかし、根本的な解決策はない。  
必ずやってくるのだ。

若いうちは、この根本的な問題にフタをしている。

年を取れば、この問題が浮き彫りになるので、苦悩が始まるのだ。

手っ取り早い解決策で、この問題を忘れることは出来る。

しかし、「生きることは苦である」という問題の解決策には不十分。

ブツダは、心のあり方で改善できると説いた。

これは、できる。

まず、人生の中で死ぬまでに何を成し遂げるか。

次に、死んでからやるべきことを見つける。

死んでからすべきことが見つかれば、生きているうちにやるべきことはひとつ。

これが楽しみになれば、人生の苦悩なんて一瞬のもの。  
常に、前向きで生きていける。

80歳になったら死んでしまおうと考えると、そこから苦悩が始まる。

未来永劫、自分は存在するのだと意識すると、そこに苦悩はない。

病気も死も怖くない。

好きなことに没頭すればよいのだ。

常識を捨てること。

それが、真理を悟ること。

仏教は「心の病院」

元気な人には全く関係ない心の病院。

病気で、現実で、困った人を助けるのが、仏教の役割。

困った人に助言することが仏教の真髄で、よりよくしようとする人には施しをしない。

そういう点では、キリスト教では困った人や苦しんだ人に直接助言をすることがない。

ああしなさいとか、こうしなさいと言うような具体的な助言は得られない。

神は、こういうものですとか、人間はこうあるべきだとか、理想の姿を説法する場面が多い。

理想の姿だけなので、普通の人には具体的な方法がわからない。

だから、日本人は躊躇するかたも多いのだろうと思う。

仏教では、葬式にしても具体的な方法を教えることにより、人々が安心できる

方法をとっているし、教えている。

また、困っているときには、お墓参りをしなさいとか、お布施をしなさいといったような具体的な助言がある。

しかし、人生の目標については具体的に教えていない。そういうことは、ビジネス書から得られることが多い。

また、キリスト教のように人間の理想を唱えることで、人生の指針になることも多いだろう。

だから、人生を苦しむ人にとっては、より人間らしい宗教が、仏教だといえるだろう。

前向きな人生の路程中は、キリスト教で教えを請う。

後ろ向きな人生を歩んでいるかたは、仏教で教えを請う。



こういうやりかたが、ベストな方法かもしれない。

仏教は、心の病院。

キリスト教は、心のカウンセラー（相談所）であるといえる。

## 智慧という武器で悪魔と戦え

瞑想を繰り返すと悪魔が対峙してくる。

この悪魔と戦うには、知恵を使ってやり過ごせと言うこと。

悪魔は、己を地獄に落とそうとレベルの低い戦いを挑んでくる。

レベルの低い戦いとは、「バカ」とか「死ね」を己に連発させるために仕掛けて

くる。

こういうことばを言っていると、悪魔の術中にはまってしまうため、瞑想が途切れてしまう。

この悪魔の戦いから逃れるためには、自分の経験で学んだ最新の学問と専門知識が必要。

悪魔の望む戦いは、悪魔が発するようなことばを連発させることにある。だから、専門知識を使って勝たなければならない。

悪魔は専門知識を知らない。

だから独自の知恵を使って、問答する必要がある。

こういうときに、釈迦の押し問答が役に立つ。

必ず、理性で押し問答をすること。

相手は口説いているのだから、口車に乗らないこと。

相手が折れるまで、戦う。

このとき、自分が得意なボキヤブラリーで戦ってはいけない。相手の思うつぼである。

ボキヤブラリーでは、自分の知恵の低さが相手に垣間見えてしまう。

最新用語を連発しても、結局はボキヤブラリーの戦いになる。

必ず理性で戦うこと。

四字熟語だけの戦いもいいかもしれない。

学生時代に学んだ電気知識、機械知識、科学知識を使って問答すればよい。

相手は、百戦錬磨の達人であるが、最新技術は知らない。

かならず、ボキヤブラリーの戦いに持っていくから、知識を持って自分のペー  
スを守ること。

以上を踏まえて、知恵で戦いなさいと、ブツダは説いている。けっして、こそくな手段の知恵ではないことを言っている。

## 恨みから離れる

## 煩惱

欲というより、悪い心の持ち方を煩惱と言おう。

ブツダは、煩惱のおおもとを「無明」（むみょう）といった。

愚かなと訳されるが、本当は真実を知らないことをいう。

本当の姿を知らなければ、間違ったことを常識だと思ってしまう。

世間の若い世代に多い人たちのことである。

テレビのドラマで見てきた間違った情報を、当たり前だと思って生きている状態である。

まさしく、無明そのものである。

真実を知りたければ、テレビを見てはいけない。

嘘偽りの言動だらけである。

テレビを見ない方が、世の中の真実を見極められる。

世の中の真実1%にも満たない嘘偽りの世界を、テレビでは堂々と流している。

不倫のドラマが多いのだが、果たしてそんなに不倫が多いだろうか？

ドラマがはやっているから、真似師が出てきたのではないだろうか。

ヨーロッパの山間部では、そんなに不倫が多いとは思えない。

すべてが、メディアの責任である。

事件が多いのも、メディアの責任である。

これは、霊界からずっと私に言われ続けたこと。

ここに言おう。

メディアがなければ、戦争、争い、殺人はない。

メディアがなければ、ただの石の投げ合いで終わる。

ここに、煩惱を加速させているのは、メディアの責任であると言った。

情報戦を制しているのも、メディアである。

では、この情報戦から真実を見つけるのにはどうしたらよいのであろう。

ちと、考えてみる。

物事を正面から出なく、裏から考える。

現代の考え方ではなく、現実に沿った合理的な考え方で物事を見る。

この2点であるといえる。

恥じなくてもよいことを恥じ、恥じなければならぬことを恥じない。そういう者たちは、誤った見解を抱いたまま、悪い場所へと生まれ変わっていく。(3  
16経)

先ほどの2点は、輪廻から解き放たれるという意味で「解脱」と言うそうです。

解脱は、死んでからは出来ません。

かならず、生きているうちに実践しなければなりません。

目の見えるうち、からだが存在する時でないと出来ないのです。

死んでしまえば、意識だけの世界です。

年がたち、新しい設備、新しい機能が製品で出てきても、見たことがないから

想像するだけです。

もちろん触れることも、機能を確かめることも、出来ません。

新しい考え方はおもいつくでしょうが、500年前の人にコンピューターは理解できません。

経験がありませんから、情報は止まったままです。

それで、英知を理解できるでしょうか？

死んでしまえば、その時代の賢者のままです。

発展はありません。

だから、死んでからは解脱は出来ません。

生きているうちに、解脱を実践しなければならぬのです。



## 憂いと快樂

愛慕の情から憂いが生じ、愛慕の情から恐れが生じる。愛慕の情を離れた者には憂いが無い。まして恐れなどどこにもあり得ない。(213 経)

快樂から憂いが生じ、快樂から恐れが生じる。快樂を離れた者には憂いが無い。まして恐れなどどこにもあり得ない。(214 経)

これらは、出家比丘(僧侶)のことをいっている。

母親、嫁、子供達を置き去りにし、出家を促すようなことばと取れる。

若くして出家するなら、問題は無いだろうが、結婚してたり、親と同居しているとそうはいかない。

難しい問題である。

憂いとは、愛情のこと。

快樂とは、仲間とのコミュニケーションのこと。

どちらも欲望の詰まった自分の楽しみ。

憂いを断ち切るとは、男女の営み、男女のつきあい、男女の遊びを一切しないこと。

快樂を断ち切るとは、宴会、飲み会、スポーツへの参加、趣味の会での集会、仲間での旅を一切しないこと。

これは、きびしい。

ただ、これらを実践しつつ、ブツダを目指すことは出来た。

憂いでは、心の中の煩惱をおさえつつ、実践しないこと。

煩惱をおさえることは不可能。

ただ、自分がその気になったとき、理性で抑える  
絶対実行しない。

快樂では、仲間の話に乗らないこと。

自分のペースで話をすすめる。

反論されても相手にしないで、未熟者と相手を決めつける。

けっして、相手のペースで実行しない。

要するに、世間とは隔離された状態でいるということらしい。

独身の一人きりの生活を思い出して欲しい。

嫁はただの同居人。

友達以上の感覚で接してはいけない。

それを実践すれば、ブツダを目指せる。

憂い（愛情）が無ければ、守る者は自分だけ。

守るべき者がいなければ、恐れを感じない。

いつ死んでもいいと思うようになる。

それが、真理を悟る道。

今のは理想論だが、正気と霊的をうまく使いこなせれば、簡単！  
でも、いついつ時でも今のことを忘れてはいけない。

### ブツダを目指す者（番外編）

当然生半可な気持ちでは到達しない。

命をかけて目指しても無理。

自己欲があると到達できません。

神に全てを捧げ、神に全てをゆだねて、天命を待つ。

悪魔が殺しにかかってきても、逃げない。

常にことばだけで戦う。

死の寸前まで行く、それでも逃げない。

休息は一切無い。

戦い抜いて自然に寝るまで続ける。

自分の命は捨てる。

自分の命を捨てて、全世界を救う。

全世界への説法を繰り返し、ひとりも殺さない。

具体的な救う道を説き、全世界を説得させる。

たったひとり残った反対者さえも、論法で説得する。

二、三日かかっても、到達する。

これは別名、先祖供養。

先祖の恨み辛みを一切成仏させる。

これは、アダムとイブの時代までの先祖に適用される。

考えもつかない膨大な数の先祖。

その先祖に対して、ひとりの落伍者もなく、説得する。

その行為に対して、永遠に終わりはない。

自分の心だけが知っている。

## 因縁

何かの物事を「因」

因の元を原因。

人が絡むことを「縁」

何かの縁がある。

因果は、「縁起」、「因縁」ともいうそうです。

縁起が悪い

何かきっかけとなった人の縁が悪かった。

縁起担ぎ

きっかけとなった人がしていたことを真似る。

因縁がある

何かきっかけとなった人と関わりがある。

先祖の因縁がある

先祖が関わったある出来事に原因があるために、子孫に影響を及ぼしている。

因果応報

ある人にかかわらなければ、こういうことにならなかった。

関わったがために、今こういうことが起きている。

因縁とは根が深いものである。

因縁を断ち切るには、外界と特に人に接しなければ、因縁を断ち切れない。



現代社会では、人と接せずに生きていくことは不可能である。

あえて行こうなら、いつもひとりでも何かをし、お店のひととも世間話をしない。そういう心構えが必要である。

家族や社内でも、用事を伝えるだけでいつも物静かな状態を維持しなければいけない。

でも、ずっと続けるわけにはいかない。

ひとりの時間を持つ、一人きりの空間を保っておれば、因縁から解き放される。

物静かなコーヒーショップでBGMだけを聞き、自分を維持する。

マックのような騒がしいところでは絶対無理だろう。

隣の話し声で、因縁が繋がってしまうのである。

悟りは、サイエンスとしても普遍の真理

悟りを得た私は、この世の物体は3つから構成されていることに気づきました。原子と原子の結びつきには、ある物体が介在しなければ結合しません。プラスイオンとマイナスイオンの間には、空間が必要です。気の対極図も陽と陰の間に線が存在します。

要するに、1の物体と2の物体の間には、空間（無）が存在するのです。この理論がわかると全てに応用できました。

そして、推論ですが、この大宇宙の外には無があり、別の大宇宙が存在しなければなりません。

さらに、この大宇宙と無と別の大宇宙が一つの大宇宙になります。

あとは、同じことの繰り返しで外に外に広がります。

現在の宇宙はどの程度広がっているかわかりませんが、今も増殖中と言っていることです。

この世の理論がわかれば、簡単に理解できます。ただ実証できるひとは誰もおりません。

悟りが開ければ、開眼すれば、このようなことは朝飯前なのです。

面白い話を一つ。

この世の最小単位の形状です。

素粒子より小さい単位は、精子の形をした右曲がりのひげです。

この世にもものが生まれるときは、精子の形をしています。種を植えると、芽が出ます。

それは、精子の形ではないでしょうか？

神は、この世の誕生を発芽の形にしたのです。

では、右曲がりは何か？

それは、思考です。

種は、発芽するとき、上に伸びたい、上に伸びたいと叫んでいるのです。

植物のつるは、先端が自分の行きたいところを探しています。

探しているということは、思考があるということです。

また、人間に右利きが多いところから、右曲がりと推測できます。

これは、鉱物、土、水にも当てはまります。

大宇宙の外に、この一本の右曲がりのひげが飛び出すと、後はどんどん結合していく仕組みです。

だから、右曲がりのひげ。

これは、神の形です。

あなたの体にも無数に神が存在します。

神は、生きとし生けるものを慈しみ、愛を持って育てる。

いかに犯罪人であろうと、分け隔て無く育てる。

あなたが生きているのは、神のなせる技だと言うことです。

神は、ひとの形をしているのでしょうか？

この世全体が、神。

この世のあらゆるものが、神の子なのです。

だから、人間は地球という神に、まずお願いしなければなりません。

日々生きていけるのも、地球の空気と地球の食べ物だけをたべているから。

われわれは、地球環境を壊してはいけません。  
それは、ただ兄弟げんかをしているだけですから・・・

## 執着を捨てる

### 執着

執着とは、仏教では執著（しゅうじやく）というそうです。  
者にくつつくものを、執ってしまうと書きます。

こだわりを捨て去らないで、こだわってしまうということでしょうか。

執着とは、「所有物」のことです。

所有物だと考えるから、こだわります。

本には、親子関係のことを書いています。

子供を自分の所有物だと考えるから、そこから執着が始まると書いてあります。

他人を所有物と考えることが出来るでしょうか？

普通は、他人です。

ですから、執着はありません。

人が何をしようが関係ありません。

それが、知人や家族となると、自分の所有物だと思ってしまう。

その典型が、異性の存在です。

仲のよい異性を自分の所有物だと考えると、そこから執着が、恋愛が始まります。

恋愛は、執着の行き着く終着点です。

二人の世界が持続すれば、執着の世界です。

でも、執着が何かの反動で溶け始めると、そこには別れが待っています。そしてふたりとも、個に戻ります。

これが、恋愛のシステムなのです。

恋愛は、執着が凝り固まった最たる者だと理解できることでしょう。

だから、結婚は執着を捨て去った者同士が到達する領域だといえます。

執着を持続していると、お互い継続できません。

世間がその見本を見せつけています。

また、ものに執着していても同じ結果でしょう。

その典型的な例がお金です。

お金は、紙です。



そんなものに執着して、なんになるのでしょうか。

まだ、人に執着した方がましです。

いくら大金持ちでも、お金に執着していれば煩惱から離れられないのです。

そういう人は際限なく上を目指します。

心は満足せず、そのまま死んでしまいます。

生活に必要なお金だけを持ち、お金に執着がなければ、心は満足できます。

執着という煩惱は、人間には必要であるけれども、ある程度の蓄えが出来たら、捨て去ることが必要だと思います。